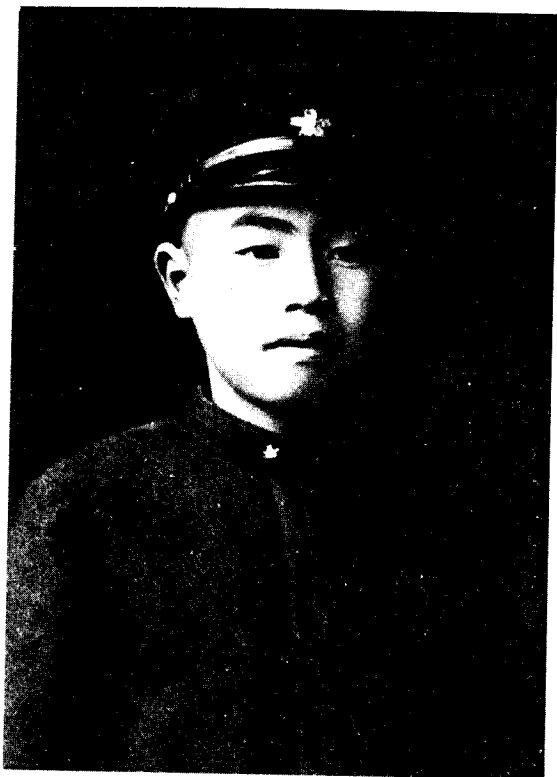


目次

第一章	大正時代……………	5
第二章	昭和十年頃まで……………	15
第三章	終戦まで……………	34
第四章	終戦より逝去まで……………	43
第五章	追憶……………	50

第一章 大正時代



学習院時代の有坂さん

明治三十六年五月九日

海軍技術中将工学博士有坂鉛蔵の次男として広島県呉市に生まる。

明治四十三年四月
学習院初等科に入
学。

大正五年四月
東京府立第一中学

校に入学。

大正九年八月二十六日 海軍兵学校に入校。

大正十二年七月十四日 同校を卒業。第五十一期生であった。同校を卒業して後水雷学

校通信科に入校した。

中学時代の有坂磐雄さんには次のような話がある。

……中学時代の家は二子多摩川に近い今の瀬田にあって、時々遊びに行った。その頃彼は火薬を使う手製の小銃や、小川の上下流百メートル位離れて、水を利用する電話を自分で作っているの、われわれはビックリした。彼の弟には後にN響のヴァイオリン奏者になった人がいる。(有坂愛彦氏である。……編者)彼はまた肉体的にも頑張りやだった。或る年の九月に暴風で東京の交通機関が全部ストップした。私は代々木から日比谷迄歩いた。学校へ着いてみて驚いた。有坂が瀬田から歩いて来て私より先に着いていたのだ。

△注1▽

アマチュア精神はすでに中学時代より発揮されていたのである。そして兵学校に入校してから、それが無線に集中して行ったのであった。愛甲文雄氏は著書の中で次のように

述べておられる。

……兵学校二学年の時(大正十年)、無線通信の話をはじめて聞いた時のことである。

有坂が「今度の日曜日はまたボートで遊ぶ」よし来た」

ボートで沖に出てラムネを飲んだり、菓子などたべていると、有坂は箱から何か取り出して頭にかぶってニヤニヤしている。

「ちょっと来いよ」というので、代わるがわるその何物かを頭にかぶると音楽が聞こえる。

勿論、有坂以外にわれわれがラジオを聞いたのはこれがはじめてであった。

実際NHKでラジオ放送をはじめたのが大正十四年三月であるから、有坂は無線通信を習うと直ぐ自分で組み立て、無線講座の教官に頼んで講堂からレコードを放送したのである。

△注2▽

このセットは如何なるものであったろうか。おそらく中波帯でアンテナ回路に送話器を直列に接続した、いわゆるアンテナ変調方式であったと思われる。当時はまだピックアップは開発されていなかったから、送話器の前でレコードを鳴らしたのであろう。受信機は鉱石式であったと思われる。

の試験通信をやった。日本本土とアメリカと直接通信が出来たのは、これがはじめてである。有坂のお陰で、「金剛」と「多摩」の通信関係者は当局から表彰された。……………

この送信機は五〇〇W（入力と思われる）であったが、周波数、その他のデータは今日では知るよしもない。

「アマチュア無線のあゆみ、日本アマチュア無線連盟五十年史」の三十九ページによれば、大正十四年、無免許局であった新子安の佐藤昭挙氏（当時二十五才）が、中波二〇〇メートルで折柄付近に停泊していた「金剛」に「軍艦々々」と呼んだところ「当艦は不法施設とは通信しません」と応答があった、と記されている。

編者はこれが有坂さんであったと思われるのである。否、有坂さんでなければこのような親切な応答をしてくれるわけではないのである。

前述の海軍無線史は、大正十四年における短波通信の状況を、次のように述べている。

……四月二十三日、海軍技術研究所に於て試作せる出力一〇W短波送信機を以て築地と技術研究所第二汽艇との間に通信試験を行い、観音崎沖まで連続受信の成績を得。（これが四戦隊式無線電信機と思われる。……編者）

五月十九日より二十三日まで真鶴無線電信所に於て、海軍技術研究所との間に短波通信試験を行うと共に外国短波無線傍受実験を行う。

六月二日、海軍技術研究所に従来の研究部及び工作課を廃し、新たに科学研究部、電気研究部、航空研究部及び造船研究部の四部を置き、無線通信は電気研究部の所掌となる。

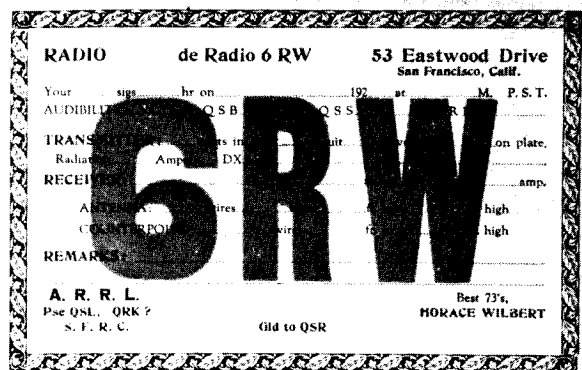
六月二日、横須賀在泊軍艦長門と築地海軍技術研究所との間に、短波同時交信実験を行う。

六月十七日、海軍技術研究所試作五〇〇W短波送信機を以て東京無線電信所船橋送信所と寺島水道在泊の軍艦金剛及び佐世保在泊特務艦佐多との間に短波通信試験を行う。

八月六日、米国サンフランシスコに向け横浜出港、十月十日横須賀帰港の軍艦多摩と東京無線電信所及び海軍技術研究所との間に五〇〇W送信機を以て短波通信試験を行う。

一方、大正十四年四月八日、通信省が短波開発のために設置した岩槻無線局J1AAは、波長八十メートルではじめてアメリカのアマチュア無線局u6RWと交信に成功した。電信で入力五〇〇W、担当は河原猛夫氏であった。

軍官共に短波で外国との交信に成功したが、大正十四年であったということは、ようやく短波通信の機が熟してきたことを意味するのである。



■ 6 RWよりJ1AAに送られたQSLカード

波長、電力などを明記していないのは、彼我共に無免許局であることを考慮されたものと思われる。なお、このカードにそえて鳥氏より次のようなお手紙をいただいた。

……有坂英雄様
有坂芳雄様

先日お話しました故ご尊父様からのQSLカード、お届けいたします。宛名(交信)はJ2SMとなっており、これはご承知の当時のUNCOV(無免許局)のつねで、こちらもいくつかの変名をもっていたためです。森本重武君(現JAINET、JARL理事、名誉会員……編者)と一緒にやっ

九ページより示す。

次に示すQSLカード(交信証)は、有坂さんが鳥茂雄氏(当時の呼出符号はJ1SH、J2SM)に宛てたものである。

- (東京)
- 1 FM 佐藤 健児
 - 1 KB 榊山 資英
 - 1 KM 宮崎 清俊
 - 1 KO 森本 重武 (JAINET)
 - 1 KW 宮嶋 健一
 - 1 LT 萩尾 直
 - 1 MO 井上 均
 - 1 MT 高山 元夫
 - 1 MU 角 百喜
 - 1 NE 詠村 昇
 - 1 SA 阿久沢四郎
 - 1 SH 島 茂雄
 - 1 SK 高田 俊一
 - 1 SM 森 慶雄
 - 1 SO 磯 英治
 - 1 TN 中桐 光彦
 - 1 TS 仙波 猛
 - 1 TT 竹田 建二
 - 1 UU 宇津木綱夫
 - 1 WW 堀北 晴朗
- (大阪)
- 2 CB 山口 喜七
 - 3 AA 笠原 功一 (JA1HAM)
 - 3 AZ 梶井 謙一 (JA1FG)
 - 3 BB 井深 大
 - 3 CC 山口 英二
 - 3 KI 菊池源一郎
 - 3 KK 草間 貫吉 (JA3HAM)
 - 3 QQ 山口 慶吉
 - 3 ST 竹島 早苗
 - 3 WW 谷川 謙
 - 4 TO 佐藤 俊秀
- (シヤンハイ)
- 1 WY 山本 和一
 - 1 YH 星野 愷
 - 1 ZB 矢木 太郎 (JH1WIX)
 - 1 ZQ 今岡 賀雄
 - 2 BB 有坂 磐雄

JARL 創立当時の盟員 < ● は故人 >

有坂さんはアマチュア無線にも進出し、J2BBの呼出符号で活躍された。

大正十五年六月十二日、日本アマチュア無線連盟(略称JARL)が創立された。当時の盟員は三十七名で、有坂さんもその一人であった。上に当時の名簿をJARL五十年史四十

KOMAZAWA 84, NEAR TOKYO, JAPAN

JLYB

To Radio _____
 I Worked you _____ G.M.T. date _____
 Heard _____
 Strength R. _____ QSB _____ QSS _____ QRM _____ QRN _____
 Remarks _____

My Receiver _____
 My Transmitter _____

Please ask others to listen for JLYB.
 I work most evenings between 0600 and 0900, 1230 and 1400 G.M.T.
 SEVENTY-THREE
 QRA Komazawa Kaniumahikizawa 84. I. ARISAKA.

JLYBのQSLカード

昭和二年三月一日、有坂さんがその前年に通信省に依頼した私設無線電信無線電話実験局が、電業第五六一号をもって免許された。波長三十八メートル、呼出符号はJLYBであった。(当時は末尾のBが実験局を表わした)

短波長の個人実験局としては、わが国第一号であった。次にQSLカードと免許状の写しを示す。

JARL五十年史の五十九ページには、

第二章 昭和十年頃まで

注1 “あの海あの空” 臼井淑郎三十二ページ、海軍兵学校第五一期会。昭和四十七年七月。

注2 “私と海軍と陶芸” 愛甲文雄九十八ページ、私家版。

(Via JTS)

送信所 J2SM
 大正十五年七月廿六日 11時0分 電局 短波長 受信スWk.
 波長 米 感度 P7 安定度 良 空電 少 送信 強

[送信機] [受信機]

新線方式 _____ 新線方式 _____
 調製入力 _____ 備 註 _____
 空中線電流 0.7amp 海軍水雷学校実験室 高周波増音 _____
 地 線 _____ 低周波増音 _____

備 考
 TX OM! MI TELEPHONE QRK? PSE QSL OM.
 大正十五年七月廿六日 當番者有坂少尉

J2BBのQSLカード

たときのコールだったと思います(カードは1TS 仙波猛氏経由で送られました) お父上はまだ少尉でいらしたようで、まだお若かったし、私共も生意気な若造共でした。五〇年は夢のように立ちました。ご霊前にお供え下さいますよう。

島 茂雄

昭和五一年九月二十九

有坂さんは大正十五年八月四日、無線電信無線電話私設許可願を通信省に提出した。

この年の十二月二十五日、大正天皇が崩御され、世は昭和と改元された。

大正十五年八月四日附出郵政省在加部郵務局上馬引八四ニ無線電
局無線電私設ノ許可可ス但シ左ノ條件ヲ遵守スヘシ
昭和二年三月一日



本局許可ノ有線開閉ノ許可ノ日ヨリ一年トス
呼出符號及呼出名稱ハ左ノ如クトス
無線電呼出符號 J L Y B
無線電呼出名稱

無線電呼出名稱

有 線 界 報

無線電呼出名稱ハ三十八ノアルニハ無線電呼出名稱ニ用テ中
國ハ之ヲ漢去ス依テ事案ヲ電報スヘシ
無線電呼出名稱ノ時間ハ午後九時五十分迄午後九時三十分ヨリ
午後十一時迄ノ間ニ限ル
本局他ノ無線電局無線電呼出名稱ノ間ノ交信ニ之ヲ使用スルコト
ヲ得ス但シ電報ノ呼出名稱ニ對シテアリタル能ク無線電局無線電
呼出名稱ニ電報此ノ電報ノ方式、電報長、所在地、電報署名、
電報及電報時間、通信ノ組合ハ此ノ限ニ合ハス
本局他ノ依リ交信シタルハ第八號ノ條件ト共ニ其ノ交信ノ
細則ヲ無線電局ノ細則ニ適用スルコトニ限ラズ
本局他ノ依リ交信シタルハ電報ノ細則ニ適用スルコトニ限ラズ
ハ無線電局ノ細則ハ呼出符號無線電局ノ細則ニ適用スルコトニ限
ラズ
本局他ノ依リ交信シタルハ無線電局ノ細則ニ適用スルコトニ限
ラズ
本局他ノ依リ交信シタルハ無線電局ノ細則ニ適用スルコトニ限
ラズ

JLYBの免許状

次のような記事がある。
……JLYBの有坂氏は当時海軍大尉であった。筆者は氏の逝去数カ月前に「貴方は当時海軍という特殊な立場で免許を得られたのか？」と、ぶしつけにも質問に及んだのであるが、氏は「いや、そういう事は全然なかった。ただ当局から君は第一号であるから、慎重に行動するように……と言われた」とのことであった。昭和二年十一月、ワシントンにおいて国際無線電信会議が開催され、その決定によって実験局の呼出符號は国別のプリフィックスの次に数字を入れることになっていたので、有

坂さんのJLYBはJICVと改められた。前ページに示したのは「無線と実験」昭和四年七月号に掲載されたJICVの紹介記事である。

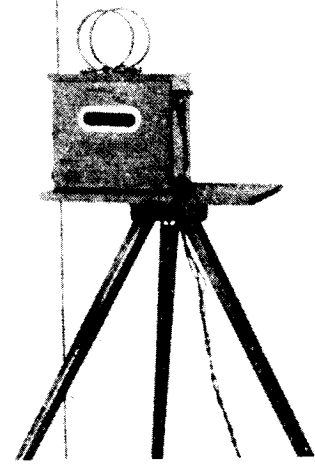
昭和五年六月二日、海軍通信学校令が發布され、水雷学校通信科は海軍通信学校に昇格した。

昭和六年四月一日、有坂さんは海軍委託学生として、東北帝国大学工学部電気工学科に入學した。

したがって私設実験局も仙台に移転し、呼出符號はJ6CDとして昭和六年四月二十七日付けで免許された。

東北帝大在学中の有坂さんについて、仙台市在住の菱沼益男氏（J6CG、現JA7FGM）より昭和五十四年四月某日付けで長文の回顧録をいただいたが、その一部を引用させていただく。

……（前略）……当時の東北大は全国一の通信工学の牙城で、八木秀次、抜山平一、宇田新太郎、渡辺寧、小池勇二郎、永井健三、その他の有名な教授陣をかかえていて、特に八木博士と宇田博士のコンビは八木アンテナ、宇田式超短波装置（写真）などで名声を博し始めた頃でした。昭和六、七年頃、JARLの東北支部も置かれるようになり、J3CH



宇田式 4 m 超短波送信機

林龍雄、J3CF菊池喜充、J3CK山口篤三郎、J3DH (J6CS) 三木正一等のメンバーが学生として東北大に集まりました。

有坂さんと私の出会い

私は父親に東京のラジオ試験放送を聞かせて間もなく、大正十五年に父親と死別しましたので、送信の設備もとのえ兼ねて、昭和

五年受信だけのライセンスを得たのですが、或る夕方、大変強力な、しかも発電機のコミニテータ音をともなった電波が出て「こちらは中杉山通り二八番地、J6CD有坂磐雄であります。どなたかお聞きの方がございましたら応答願います。」というアナウンスでした。なお、受信機は再生式らしく、ピューピューとバンド内をウォッチしているのが判りましたので、とっさにこちらの受信機を発振状態にして、悪いことと知りながら、J6CD……DE、J100と電信で呼び出しまして、興奮して顔を真赤にしながらあやしげな通信をやってしまいました。誠に不名誉ながら、これが私の最初のモールス通信QSO

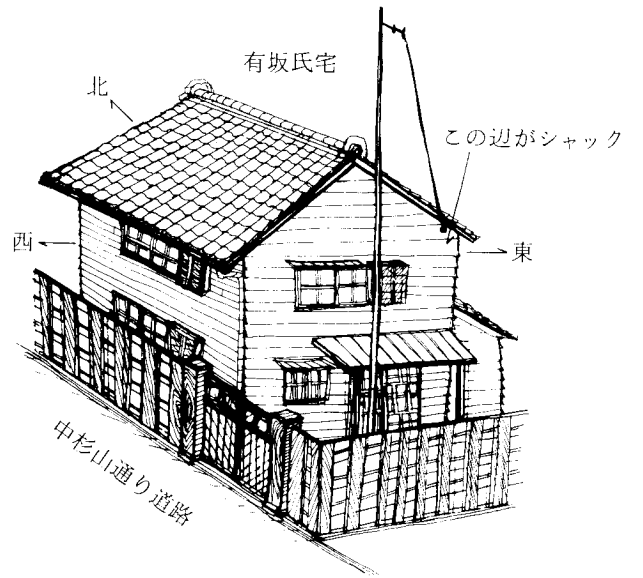
になってしまいました。

さて、通信を終って見るとどうも良心の呵責に絶えず、思い切って有坂さん宅にお詫びに上ることにしました。私の家は外記丁通り、有坂さん宅は中杉山通りで、三ノ四〇〇メ



旧地名・当時の地図

ートルのはずです。「実は私、受信だけの免許を持っていて菱沼と申しますが、お近くで有坂さんの電波を受信しましたのでお尋ねいたしました。」と、おっかなびっくり来意をおつけしました。おしとやかな奥様で、直ぐに有坂さんが出て来られ「まあ上んなさい」と言われ、自分のことや仙台のアマチュアのことなどお話し



たらしいのですが、本音は数時間前のアンカバのお詫びがしたかったので、やがて「実は先程の……」とお詫びを始めました。「ああそうでしょう、どうもそんな気がした。周波数が受信の度に飛ぶんだモンネ、J-1にしては感度も良すぎたしフェージングもなかった。」などと笑いとばして下さいました。(当時の地図とお宅の様子を示す。……編者)

汚いあばら家のシャックを丁寧に見られ、資金がないため何から何まで自製のパーツとどこからともなく集めたジャンク品などに大変興味を持たれ、私の熱心を買って下さって、それからは私を引き立てて下さる様になりました。そんなわけでQSOはとにかく仙台のアマチュアとしては、最初に有坂さんにアタックしたわけです。それから間もなく、私も

ON AIRしましたのが、昭和六年のことだったと思います。

有坂さんのシャック

驚くべきことに、有坂さんのシャックの構成は、ほとんど全部がジャンク品の改造でした。二階の畳敷八畳の間の東側に配電盤と机を並べ、棚に送信機などを並べるのは良いとして、送受信機の電源回路に入る計器類は、径二十五センチ位の発電電所用の計器を配電盤一はいに並べ(勿論全部ご自分で改造し、目盛板も書き替え校正済み)スイッチを入れ、この大きな計器群が一せいに指針が振れるのは、まことに壯観でした。電源室はシャックの下にトタン張りの発電機室をこしらえて三相交流を入れ、三相モーターに発電機を直結、この発電機は飛行機用のジャンク品の由でした。

有坂さんは外国で休暇上陸をすると、いろいろの穴場があって、いろいろのジャンク品が手に入るお話なども伺いました。少なくともJUNKという外来語が、仙台のアマチュア間で用いられたのは、有坂さんが発祥の様です。

或る日はジャンク品の小型メーターのスケール書きをしてもらいました。チョンチョンとフロットして「 $\frac{1}{2}$ を決定するのはスケールで測るより人間の目は正確なんですよ」と

言われた言葉を今でも記憶しております。

有坂さん宅を訪問すると必ず奥様も一緒に、お淑やかな方なので出すぎた発言はなさらず聞き役に廻られましたか、コーヒーを入れて下さったり、食事をご馳走して下さいたりするとき、台所へ行かれる以外はいつも私達のお仲間で、台所におられても何か面白い話題になると「富ちゃん、富ちゃん」と呼ばれ、アマチュア仲間でもお仲の良いことは評判でした。「菱沼さんはエラいんだよ、何でも作っちゃうんだからねー」などと奥さんに話すと、奥様はハア、ハアと感心した様に聞いておられました。

キーイングもマスターされていた様で、フォンには出られなかったがキーイングのON AIRはやっておられたと有坂さんが話しておられたし「ライセンスにも助手として使用する様に記入してあるんですよ」と言っておられたから、或いは日本のYLアマチュアの第一号ともいえるかも知れません。

風の便りに奥様は早く亡くなられたとも伺いましたが、いかがだったのでしょうか。

私のシャックと有坂さん

先に述べましたように、私は有坂さんに初めてお会いした頃は受信だけのライセンスでしたが、ON AIRの準備だけはしておりました。三畳のシャックについている半間二段の押入の戸を取払い、その戸は押入の反対側一畳の上に作業台として使用、押入の下段がかくれる様に机と椅子、机の上には受信機、押入上段には送信機、空中線は押入上段の直ぐ上のトタン屋根をくりぬいて引込碍子を入れ、裏に十五メートルの柱を立て、七・一Mcのファンダメンタル、空中線電流計、陽極電流計も自製、押入下段は実験ガラクタ（正にジャンク）反対側の戸板の机には、これも上下にガラクタという寸法。お客様が入れる余裕は畳一畳分だけという具合で、中学生のくせに学業の本などはどこかの片隅にといた部屋でした。

有坂さんが来ると「ウンコリヤいいぞ、これ下さいよ、その代り私のは何でもあげるから」なんてつまらないものを持って帰られました。私に不足なものを下さりたくて、私に恥をかかせないために、そんな態度を取られたのではないかと思われます。時には「菱沼サン何か出来たんじゃないの、菱沼サンは私に持って行かれるもんだからカクす様にナッタからナ？一寸ごめんよ、ここ見せてね」なんて押入の下にもぐり込んで「ホーラあった、あった、これはいいやこれ下さいよ。その代りにコーラン社の碍子をあげるから」なんて会話もありました。私もおかしいやら有難いやら困ったやらで、遠慮ないおつき合

いが出来る様になって行きました。このときいただいた罫子は現在でも二個持っております。……(中略)……(このあと菱沼氏はJ6CGの免許を得られた。……編者)

私の就職と有坂さん

わたくしは昭和六年、旧制中学を卒業しました。母親のすねかじりであったことと、皆さんから(最年少者で)チャホヤされていた事、先に述べたようにNHKに面識があった事、学校の学業は放棄して無線工学、電気工学などの勉強が主であった事、誠におろかも五、六年の技術経験があった事などのウヌボレから、上級学校には進まない決心をしました。NHK位は雇ってもらえると思っていたのが、今でも記録に残っていますが、当時は大変な就職難の時代で、事前工作でもやればよかったのですが、そんなことも知らず、NHKにも振られてしまい、始めて実社会の手ごわさを知らされました。菊地亀一郎氏(J6DC)が見兼ねて自社(石油販売をやっていた)の取引先の外国石油商社に就職させてくれるまで半年も遊びました。

そのうちに先の林義則氏(昭和三年九月十四日、私設無線電話実験局の免許を得た。当時の電話の局には呼出符号はなかった。)が企業を始め、多分私をねらったのでしようが、小さな店舗改造の工場をつくって先ず事務員を置き、多少の工作機械などを入れ私に勧誘がありました。現在就職中であることでお断りしました。それでも一寸手伝うだけで良からといわれ、漁業無線局などに林氏と出張、関係者に受註のため挨拶するためなどに引張り出されましたが、有坂さん、菊地さんが猛反対して、林氏に直接断わってくれて、この話は解消してしまいました。

林氏は新婚の新局に、珍らしい三十センチのクレオソート柱のアンテナを建てて、超短波の研究中でしたが、企ていた工場も目の目を見ずご病気のため亡くなりました。今度は菊地氏が宇田博士の発明した超短波無線を造る工場を発足させましたが、有坂さんがまだどうなるかわからぬから行ってはいけないと忠告して下さっておりましたが、やがてもう大丈夫になったから行きなさいと言って下され、その会社発足半年後に入社することになりました。日電商会という合資会社でしたが、あとで日電電波工業(合)として日本電池の資本が入り、さらに日電電波工業(株)として日本電気のテコ入れがあり、昭和十三年には海軍指定工場となりました。

日本電気が戦時中、住友通信工業と改称したとき、その名を貰って日本電気となり、終戦で日電工業(株)、二年程で戦時中の人員の整理からストで一時、日本電気と絶縁、私は

社長と共に退社、その後五年程で又、日本電気系となり、日電製作所として最近まで存続しましたが、現在は東北日本電気として完全な日本電気となっています。日電製作所消滅の前に日電製作所の歴史のような冊子が出て、私のところにも送られて来ましたが、有坂さん宅へも送られたでしょうか。この冊子の中に、先に述べた有坂さんが今度は大丈夫だから日電商会に入る様に言って下さった意味が始めて了解出来た記事がありました。大学の宇田博士の特許、実用新案を含め九件を、有坂さんのあっせんで日電商会が譲渡を受けたということ。この事で有坂さんは譲渡完了と共にこの会社が東北大とも或いは通信局ともまた軍などともつながることを予見されて、私に入社をすすめて下さったのでした。

JARLと有坂さんと私のこと

JARLに関連したことは昭和六年から昭和九年初期にかけてですが、私の記録がほとんどなく、かすかな記憶です。人名、JARL東北支部の担当期間などは、JARL五十年史がたしかなものと思います。

最初、J6CA島貫氏が東北支部を受持ったと思いますが、やがて辞退され、有坂さんが私のところに来られて、自分は軍務中の身なので引受けるわけに行かぬが、菱沼さんなら適任だと思うので是非引受ける様に、とのことで私も再三辞退しましたが、とうとうバトンタッチされてしまいました。その頃は各局の消息を毎月本部に報告し、本部ではJARLニュースとして各局に配布する方式でした。ある月のJ6CDのコラムに「有坂さん大学で超短波チャータンパで大忙し、此の程2ndオベをご製作」などと書いて「アリア、イケマセンヨ」と叱られたことを今でも思い出して、すまないことをしたと思っています。

良く考えて見ると、有坂さんは海軍大尉の軍務で東北人に委託生として留学中のお身上で、こんなことも時局柄或る意味では軍の機密にふれることでもあったと思います。また「2ndオベをご製作」とは、このとき赤ちゃんが生れなされたことを書いたつもりですが、年少者が書くには一寸浮わつた記事であったと今でも反省しております。この赤ちゃんが貴君であったらうと思っておりましたが、コールブックで拝見しますと、貴君のご誕生は昭和十一年と見えますので、或は兄上か姉上であられたのかなとも思っております。

(JARLYZ有坂英雄氏である。……編者)

JARL東北支部も、私の就職のためか或いはJ6CG廃局のためか、何年やったのか

何か月だったのかも記憶になくなりましたが、来仙、大学に入学されたJ3CK三木正一氏がJ6CSを開局されたのに頼み込んで、お引受願った様に思っております。

J6のミーティングと有坂さん

J6のミーティングは、当初はメンバーも少なく、各々訪問し合った程度でしたが、時にはNHKの会議室を貸していただいた事もあった様です。先に述べたJ3組が増員するに及んで、私が会場に困っていることを有坂さんに話すと「アーそれじゃボクんちでやりましょうよ、手伝って下さいヨ」などとおっしゃって、その会場はシャックの部屋と隣室のふすまを取払い、テーブルはお宅の在庫テーブルに張板（現在では見られません）、衣類の布地を洗濯し張り付け日光で乾かす板）などを渡し、テーブルクロスを掛け、椅子は在庫のもののお宅の裏からハンゴを持って来て両端にリング箱を置き、それに座布団をして毛布を掛ける、誠に軍人らしい即決作業で立派なミーティングができたものでした。

陸軍大尉だったかのJ3DA小沢匡四郎氏の来訪があった時も、有坂氏宅で歓迎会をやりまして、その時の有坂さんがセルフタイマーで撮って下さった写真が残っております。

お宅にも残っているでしょうか。……（中略）……

大学における有坂さんのプロフィール

昭和六年、私が石油会社にいた頃、会社前で偶然に有坂さんが自転車に組み立てた送受信機を積んで、送話器で話しながらやってくるのに出会いました。自転車を止め、一寸通話を休んで挨拶されましたが、超短波の同時送受信であること以外は秘密事項で何も話せません、とのことでした。やがて私が手掛けることになる宇田式超短波装置であることは間違いなようでした。二波を送受にした同時通話であることも解りましたが、驚いたのは一メートル程の空中線が細い銅線で、バネの様にブラブラさせながら移動通話ができるのです。再生式で受信するとあのチョロチョロした電波が、そんな安定なものかとビックリしたわけです。その様なことが出来るとは一般の通行人は誰も想像もしなかったでしょうから、人だかりもしなかったのです。翌年、私もこの宇田式超短波を製作して売る日電商会に入っ、すべては氷解いたしました……（中略）……

会社へは有坂さんは遠慮されてほとんど来られなかったのですが、^{注1}酒田、飛島間の無線が一段落したころ、大学の研究室に私達が押し掛けて、超短波医療器の実習とお手伝

いに行きました。宇田博士は外遊中であったのか、有坂さんがチーフで、一〇〇Wの超短波発振器から出力を取り、LC回路の中に入れたピーカーの食塩水の温度上昇のテスト、あるいはラジオオメスのテストで牛肉塊を切りさいたり、徹夜で何日も一緒にしたことが思い出されます。

有坂さんは大学では海軍の委託学生とはいいながら、ご自分のご趣味というからお志ざしというか、すでに無線界では経験豊富な、行動的な実戦派で、理論だけを先行させた大学派の中では、委託学生とはいいながら宇田博士などに取って得難い存在であったと思います。博士に取っては懐刀であったのでした。……(中略)……

昭和九年始め、私の家は東六番丁という町に移転しました。有坂さんから電話があつて「アンテナの木柱があるから取りに来ませんか」というので、母親と一緒に邪魔して二人でかついでかえり、間もなくこの柱を主柱として、三脚の組立アンテナを建てました。

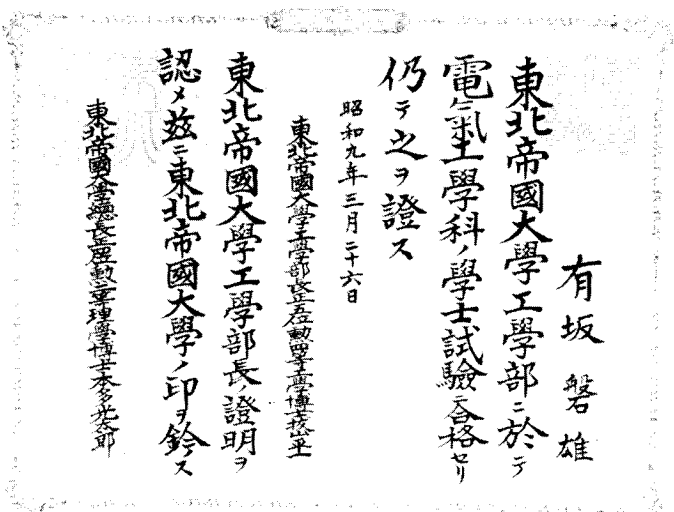
有坂さんはこの時、東京へお帰りだったのでしよう。海軍の軍服で帯剣された有坂さんを駅にお送りしたのはいつだったのでしょうか。……(後略)……

有坂さんは昭和九年三月二十六日、東北帝国大学工学部電気工学科を卒業し東京へ帰ら

れた。その後空母「鳳翔」の通信長と
なられた。

△注1▽編者注、昭和八年十一月山形県酒
田市と離島、飛島の間四十キロメートル
に開通したわが国最初の公衆用有線無線
連絡回線。A三電波出力十Wで周波数は
三十四メガヘルツと三十九メガヘルツで
あつた。

東北帝大卒業証書



第三章 終戦まで

“鳳翔”通信長のあと、有坂さんは当時一番問題が多く一番重要視された航空無線を研究するために、海軍航空技術廠の部員を命ぜられ、同時に通信学校の教官も兼ねられた。そして昭和十年十一月十五日海軍少佐に任官された。

鎌倉に居を移された有坂さんは、再び私設無線電信、無線電話実験局の免許を得られた。昭和九年六月四日付けで、呼出符号はJ2KRであった。この鎌倉町材木座四一八番地は、現在の鎌倉市材木座三丁目十三の四〇に当る。

当時のシャックを見学したJA1VB小島哲夫氏は、若き日の感激を次のように述べておられる。

……昭和十年頃のことだった。鎌倉の由比が浜通りのキング商会（吉岡重夫氏）という電気屋さんに連れられて、材木座の、とある家に行った。その家は何の変哲もない普通の家

である。

その頃のわたしは、つかれたようにラジオに熱中していた。一つにはJOAKが十kWから五十kWにQRO（増力）し、鎌倉でも方鉛鉱のかけらを使った鉱石ラジオで受信が可能になったこと、古沢匡一郎氏の少年向けの「模型製作ABC」という本が手許にあったこと、誠文堂新光社発行の「子供の科学」といった雑誌を購入していたことなどのためであつたらう。更に、前記吉岡重夫氏にかわいがられ、氏の店に常に遊びに行き、ラジオ修理の実際にふれることができたためであらう。

さて材木座のその家では、小さな来客

日本 J2KR 鎌倉							
昭和	年	月	日	午	時	分	信
感度	_____	天候	_____	送信機	_____		
了解度	_____	妨害	_____	受信機	_____		
所在地 神奈川県鎌倉町材木座四一八 有坂 馨 雄							

J2KRのQSLカード

を心から歓待してくれた。ご主人と吉岡氏は何かわからない話をしていた。が、やおら押入れの襖を開いた。そこにはメーターの並んだひと目でラジオの大きいものとわかるものが鎮座していた。

やがて交信が始まった。菓子を喰べるのを忘れ、わたしはその光景の中に浸った。

「これだ」わたしが何かを求め、いたずら小僧に終始したのは。それはこのようなことを求めていたのだ……そう自分に言いかけた。あれから四十余年、あの時の感激は昨日のように思い出される。恐らく死ぬ迄あの時の感激は生々しく息づいていくに違いない。

この感激を与えてくれた人、それが有坂さんである。

戦後鎌倉クラブの会合で、当時の話をしたところ、非常によく覚えていただきたき、「あの時の坊やですか」と握手を求められた。

二十何年ぶりかで、あこがれていた方から親しく握手を求められたことも、また忘れられないことの一つである。

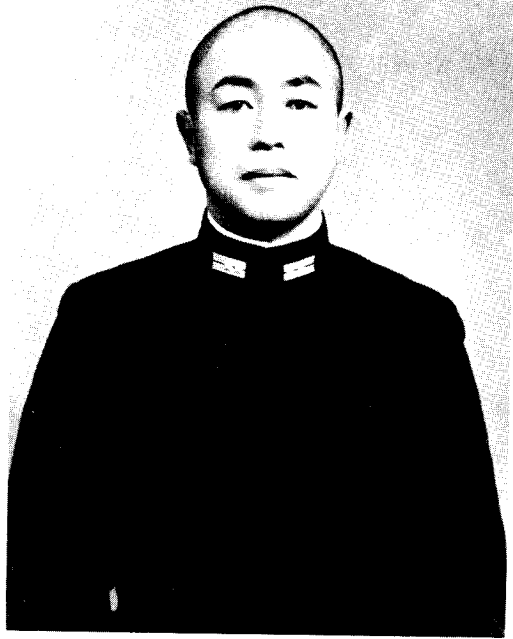
.....

一方、愛甲氏は前述の「私と海軍と陶芸」で次のように述べておられる。

……昭和十四年、私が横須賀航空隊の教官の時、電波測巨儀のことで彼に相談に行った。

当時、飛行機用魚雷は航空攻撃兵器（対艦船）の主兵器であった。特に夜間攻撃の場合、雷撃のほか対策はなかった。雷撃で一番むづかしいのは測巨（敵艦との距離測定）であった。

当時、飛行機の高度を測るためには、電波高度計があつて良好な成績であつた。私の考えでは、これを横に向ければ電波測巨儀になるのではないか。しかも目標は水よりも電波



海軍中佐時代の有坂さん

測巨儀にとつては有利な鉄の塊の軍艦であるから、というのであつた。

彼は「面白い、研究して見よう、しばらく時間をくれ」ということで私は辞去した。

一週間位して彼は横空の私のところにやって来て「愛甲、出来るよ。横

空司令の名前で要求性能など入れて要求書を出してくれ」「よし来た。頼むよ」ということで別れた。それから数日たって有坂がまたやって来た。憤然としている。「どうした有坂」「すまない、実にすまない、例の測巨儀の件、実は上司に内報告をしたのだよ。ところが上司はどうしてもウンといわないんだよ。この忙しいのに出来るか出来ないかわからん物はこの際やるなというんだ。技術者には用兵のことはわからないからね」といって帰って行った。

それから数年、北方面作戦中、我が艦隊は視界零の霧の中から突然飛行機の機銃射撃を受けてひどい目に会い大騒ぎになった。電波測巨儀がリーダーという名前で相手方に出て来たのである。有坂はくやしがあったが後の祭であった。ミッドウェー作戦敗戦の原因は他にも沢山あるが、リーダーがなかったこともその大きな原因の一つである。……(中略)

私はまだかつて有坂くらいハートの良い人間に会ったことはない。海軍には昔からハート・ボロ・ナイスという俗語があった。有坂はまさしくハート・ボロ・ナイスの見本のよきな男であった。……(後略)……



昭和16年1月 氷川丸にて

有坂さんは昭和十六年一月、日本郵船の氷川丸で、米国駐在造兵監督官として、三カ年の予定で渡米された。

ニューヨークで執務し、フリンストンに住まわれたが、日米間の情勢が険悪化し、同年十一月、アルゼンチン經由大阪商船のブエノスアイレス丸で帰国された。

昭和十六年十二月八日、わが国は太平洋戦争に突入した。

帰朝された有坂さんは、連合艦隊司令部付となったが、その後、第二技術廠通信兵器部部長(航空通信兵器研究主任)とられた。

その後の有坂さんの挙げた業績の主

なものは、まず昭和十七年五月二十七日、九六式空二号無線電信機の考案完成に関し海軍技術有功賞を受賞された。

この九六式空二号無線電信機は、

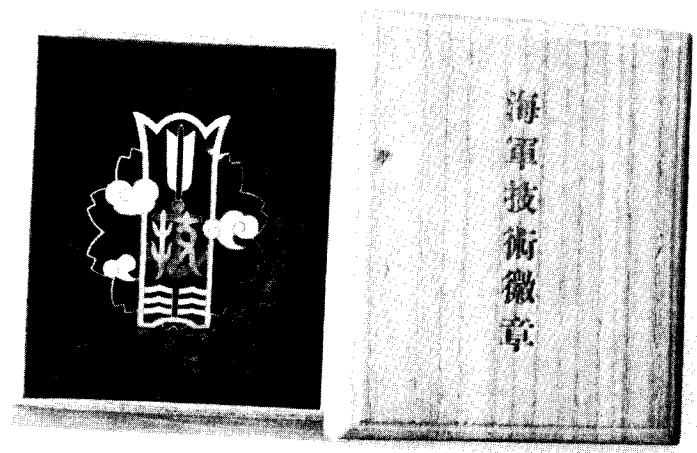
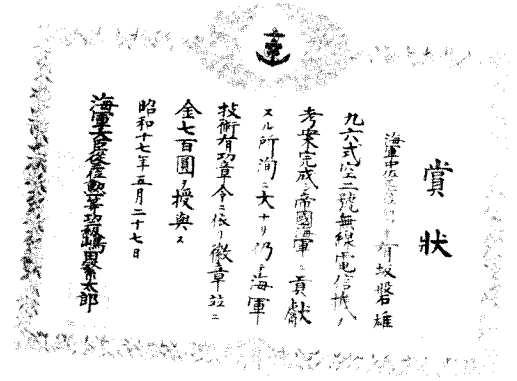
……弾着観測機を含む一般二座機用として設計されたもので出力約四〇W、電話十Wサブレッサー変調、送信機は水晶制御主用、倍周波数増幅、送信真空管UZ五一〇×三、周波数範囲は短波五千kc〜一万kc、中波三〇〇kc〜五〇〇kcで短波帯では任意の三波を一挙動で電波を転換する事が出来る上、受信した電波に送信周波数を合わせる事も可能である。

受信機は高周波一段付水晶制御兼用七球式スーパーヘテロダイン、水晶校正装置も内蔵されている。受信真空管は改一以後全部FM2A05A、改四は全部「ソラ」で中間周波六三五kc短波連絡五〇〇漚以上、中波は八十漚内外で此の方位測定可能である。重量四五・七kg、一〇〇〇V、一八〇mA及び二五〇V六〇mAの発電動機を使用する。妨害電波除去用の周波数継電装置に接続可能である。△注▽

さらに、昭和十七年八月一日 水晶発振子の考案完成に関し、海軍技術有功賞を受賞。

昭和十九年三月二十日 航空機用隊内無線電話機の考案完成に関し海軍技術有功賞を受賞

海軍技術有功賞状



海軍技術徽章

賞。

昭和十九年十二月八日 電波高度計の航空機用兵器への適用に関し技術院賞を受賞。
に示されるようにめざましいものであった。

有坂さんは昭和十九年十月十五日海軍大佐に任官された。

昭和二十年八月十五日 わが国の敗戦により太平洋戦争は終結した。

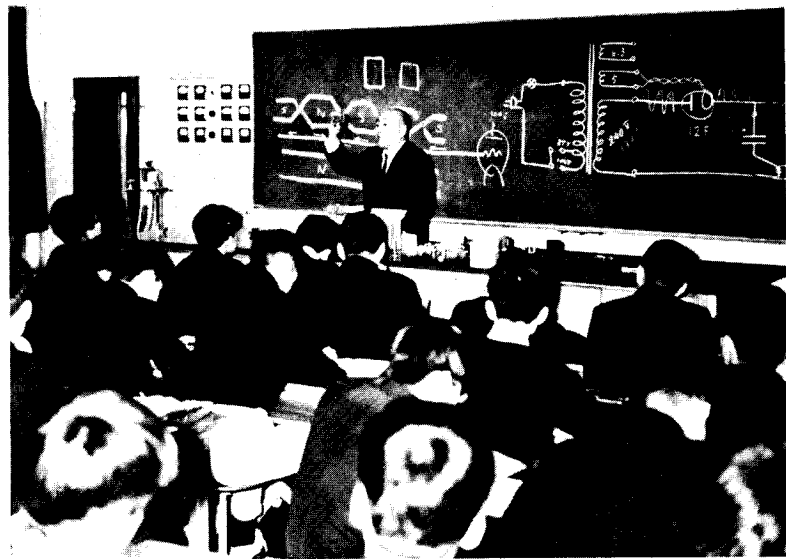
終戦当時、海軍大佐の要職にあった有坂さんは、内外の情勢にくわしかったので、この
帰結を十分察知しておられたようである。

△注1▽有坂磐雄他『航空技術の全貌』二三五ページ 昭和五十一年四月、原書房

第四章 終戦より逝去まで

有坂さんは昭和二十一年五月、横浜の旭電機創立の一員となったが、昭和二十四年退職
された。以下再び愛甲氏の著書を引用する。

……終戦後（昭和二十四年……編者）私が逗子の今の工場に移ってくると、どこで誰に聞
いたか、一部の書類を持って来て「愛甲ここに印判を押せ」と強制命令である。見ると「有
愛電気株式会社」の設立書類である。社長向山均、専務有坂磐雄、取締役名和武、愛甲文
雄、設立の場所、第一合成化学工業株式会社内（愛甲の工場内）という趣旨である。そう
して、その午後、向山さん、名和さんを連れて来た。名和さん曰く「六カ月もつづきませ
んよ、やりましようよ」、その翌日から長男英雄君、長女明子さん、外に一名（芳雄氏で
ある。……編者）連れてきて何か始めたが、名和さんの予言どおり六カ月位で止めになっ
た。……（後略）……



講義中の有坂さん

使用を停止された。その時点でのアマチュア無線局数は二二二局であった。ちなみにこの時のアメリカのアマチュア無線局数は五万余局といわれている。そして戦後再開されたのは昭和二十七年七月二十九日であった。

有坂さんは大先輩としてよく鎌倉（アマチュア無線）クラブのミーティングに出席されて後輩の指導に当られた。

このミーティングは毎月のように開かれたが、写真は昭和二十九年一月二十四日、鎌倉第一小学校で開かれた際のものである。

英雄氏によれば、この会社は横浜、三波工業の下請で海上関係の無線機を製造したり、その他拡声装置などを製造したとのことである。有愛電気を解散したあと再び旭電機の顧問をされたが、昭和二十五年より栄光学園講師となり、逝去されるまで続けられた。昭和二十五年十一月、有坂家は材木座より浄明寺五六二番地に移転した。

再び愛甲氏の著書を引用する。

……有坂は有愛電気を解散してから亡くなるまで、横須賀（現在は大船）にある栄光学園の物理の講師をしていた。生徒からは勿論、先生や父兄からも「有坂先生、有坂先生」といって慕われ尊敬されていた。……（中略）……

彼は講義が実に上手であった。海軍では新兵器が来ると必ず巡回教育がある。講義を聞いているときは、兵器が生きもののようによく動いて、全部了解できたような気がする。しかし、後で自分で反趨して見るとさっぱりわからなかった。妙な教え方もあるものだった。……（後略）……

わが国におけるアマチュア無線局は、昭和十六年十二月十三日無線電信法第八条により



鎌倉クラブのミーティング

出席者は前列右から（敬称略、カッコ内の職名は昭和五十五年三月現在）

J A 1 A K B 佐藤裕三、J A 1 C A 岡本次雄（日本アマチュア無線連盟副会長）、J J 1 U J K 渡辺泰一、有坂磐雄、J R 1 L D R 中川国之助（電気店自営）

後列右から J A 1 A Y 徳間敏致（東日本放送取締役技術局長）、J A 1 B H R 安川七郎（日本債券信用銀行頭取）、J A 1 V B 小島哲夫（鎌倉腰越小学校校長）、J A 1 O G 石黒忠久（神奈川県立日野高等学校教諭）、J A 1 N W 長野洋士（インストロンジヤパン技術部長）、J A 1 S V 駒木悦郎（菓子店自営）、J A 1 T X 永井甲子男（鎌倉市消防本部通信係長）、J A 1 A Y Z 有坂英雄（日

本ビクター研究開発本部技師）、J A 1 V D 池上康彦、J A 1 S C 松村創（ハイデルベルク大学）、J A 1 O I 佐藤誠の諸氏で、撮影は J A 1 V A 峯藤文雄氏である。当日は雪で三〇〇ミリも積り、一月としては气象台開設以来の記録といわれた。

有坂さんはまた昭和三十年日本出版協同株式会社刊行の『航空技術の全貌』の第七章、航空通信及航空電波兵器を六十六ページにわたって執筆されている。

一方、昭和三十一年三月二十八日、長男英雄氏がアマチュア無線局 J A 1 A Y Z の免許を受けられた。

さらに次男芳雄氏（株式会社ユニバーサル企画社長、J A R L 理事）が、昭和三十六年四月三日、J A 1 H Q G の免許を得られた。なお、現在では同氏の長男一雄君が J K 1 D F L、長女の陽子さんが J K 1 D F K の免許を持っている。

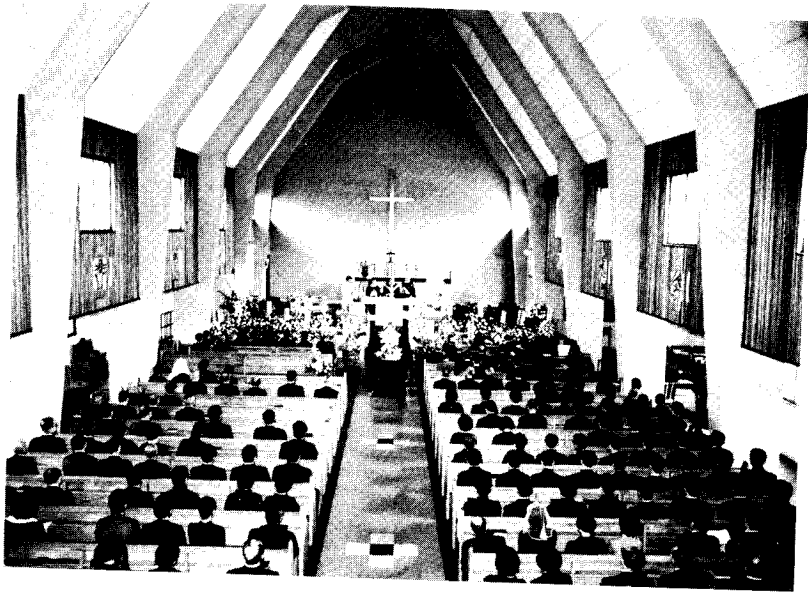
今日、日本のアマチュア無線家の親子二代というのは珍らしくないが、三代にわたり活躍している例は、皆無ではないとしてもきわめてすくないであろう。

有坂さんも、昭和三十九年四月十四日第二級アマチュア無線技士の資格を取得されたが、ご自身の局はついにお持ちにならなかった。

有坂さんは昭和四十五年二月十六日、秋葉原のラジオ街にて買物中倒れ、ご自身の意志で東京医科歯科大学病院に入院された。病名は脳血栓と診断された。

編者の一人、岡本次雄の日記は、次のように記している。

……三月二十四日



雪の下カトリック教会での葬儀

ず。
 AYZ、HQG両君にもうまく挨拶
 できず醜態なり。二〇三〇頃帰宅す。
 ……………
 有坂さんの一生は電波と芸術の一生
 であった。

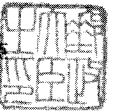
右の者は、無任従事者国家
 試験及び免状規則により、左
 記資格の免状を有するもので
 あることを証明する。

昭和 29年 4 月 4 日



第2級アマチュア無線技士免許証
 免許証の番号 AOI 第 50 号
 免許の年月日 昭和 29年 4 月 4 日
 本籍の都道府県 東京都
 氏名 有坂 繁雄
 昭和 36年 5月 9日生

郵政大臣



第2級アマチュア無線技士免許証
 市雪の下カトリック教会で葬儀が行なわれた。

编者岡本の日記は次のように記している。

……四月二十六日

……一九〇〇頃、有坂家のお通夜に行く。参会者多数なり。涙おさえてもおさえても止ら

……午後、お茶の水の医科歯科大学病院に有坂
 さんのお見舞に行く。廊下で奥さまに会う。有坂
 さんは今日より歩行練習をはじめるところなり
 「歩ける、歩ける」といわれて、わずかに歩きた
 り。バレリーナの谷桃子さんお見舞に来りあり。
 有坂さん盛んに女史を同室の人に紹介せり。……

……
 このように、一時は快方に向われたが、四月二
 十五日、心筋硬塞を併発して逝去された。享年六
 十六才であった。

四月二十六日、自宅にて通夜、二十七日、鎌倉

第五章 追憶

再び愛甲氏の著書を引用する。

……有坂は熱心なクリスチャンであった。しかし、教会へ行くとかそんな外面的なことはあまり好まないようであった。

讃美歌も実に上手であった。讃美歌のみならず、流行歌でも何でも上手であった。家族の人達に聞くと、家庭内では殆んど歌っていなかったということである。実は、私も一周忌のとき録音によって約一時間聞いたのである。その録音は、先年有坂が栄光学園の先生方に、流行歌を聞けばその時代の風潮がわかるかというて、約半日間かかって、注釈付きで明治のはじめから昭和の半ばまでを彼が歌ったのを吹き込んだものを、その注釈のところと、代表歌にしぼって再録音したものを聞かしてもらって、始めてわかったものである。……(中略)……



右より有坂英雄、芳雄、文雄、三矢アナウンサー、愛彦、磐雄の諸氏
(昭和43年12月15日NETにて)

彼はまた楽器は何でもこなした。

NHK、NET、もう一つどこかの民放で、都合三回にわたって、家族ぐるみで家財道具を使って演奏している。

例えば、ドラム缶にはかの楽器の弦を三本張ってシンブラーと称し、奏者をシンフリスト(意味は簡単)といつて、自らシンフリストとなり全部自分で作っている。

シンブラーはドラム缶も大きく、かつ、まるみのある音を出し、有坂を見るような楽器である。……(後略)……

奥さんの言子さんは、前述の「あの海あの空」二十八ページで次のように

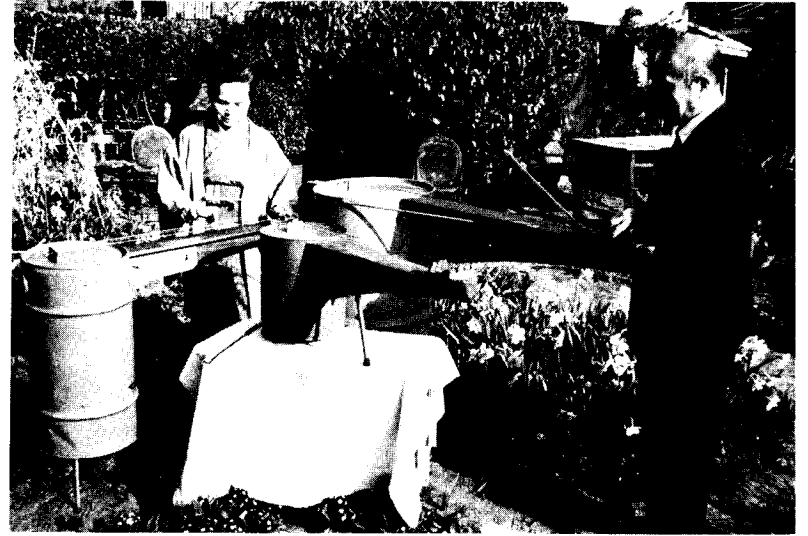


鳥と有坂さん

大勢の子供を抱え、毎日の家事に追われて、ゆっくりと庭を眺めている閑もない毎日であった。とは申しますものの、今少し、この四季折々の花を愛でられる事に対しての感謝の気持と、心のゆとりとを持っていたならばと、今更くやまれる毎日でございます。犬や猫は、飼主の心が、よ

の栄光学園の神父様が述べられた追悼の辞と共に、胸の痛くなる思いで今ふり返ってみて居ります。

主人が亡くなってみて、我家の庭は、春には春の、夏には夏の、そして秋らしい花と、木枯の中でさえ真赤なサルビヤが、燃える様に庭中に広がり、霜がひどく降りる迄咲き続け、四季折々に楽しいものであった事が始めて判りました。



手作りの楽器を楽しむ有坂さん夫妻

述べておられる。

……心から好きだった鎌倉の浄明寺の家、そして再び帰える事のない家を後に、永遠のお別れの式、告別式へと教会に参ります時、柩の中の主人は、自分で丹精こめて咲かせた真赤なチュリップに体全体を埋め、微かなほゝえみをたたえて居りました。

鎌倉雪の下教会での告別式の間中、主人の歌う「主よみもとに近づかん」の讃美歌が、静に会場に流れて居りました。

自分で作った花に埋り、そして自分で悲しみの讃美歌を歌う告別式は、真に有坂らしいものであったと、あの折

く判ると申しますが、鳥に主人の心がかよっていたとは思ってもみない事でした。主人は、ほんとうに心から鳥達が好きでした。それも巻毛のチャボだとか、金鶏鳥、雉、と種類が多く、それ等が多い時には百羽近くも居りました。

中でも一番大切に居りましたのが金鶏鳥でした。日曜など、一寸閑があるといつ迄もいつ迄も鳥小屋の前に、ぢっと立って眺めている主人の姿をよく見かけたものでした。この金鶏鳥が主人の亡くなるのと一所に、バタバタと倒れていってしまいました。これを見つけた時の気持は何とも言われないものでした。

それでもあとまだ沢山の鳥共が残され、これ等を、どうしたらよろしいかしら、と頭をなやませてしまいました。あんなに大切に可愛がって居りました事を考えますと。

クラスの下下様など、色々心配なさせて頂きました。チャボについては、常々、十

鳥の生活

有坂 公

有坂さん筆の書幅
(昭和39年)

五年かかってやっと改良し、作り上げたものだと申しで居りました。

それからしばらくして、皆様方のお骨折で、やっと鳥達の落付き先も見つかりました。

早朝の鶏のときの声も聞えなくなり、鳥達の餌の分前をもらいに来ていた、数百羽の雀のさえずりも次第次第に聞えなくなり、あんなに賑やかだった我家の庭も、主を亡くして、シーンと静まり返ってしまいました。

やがて主人の御骨を大船のカトリック教会にお預けする五十日祭の朝がやって参りました。御骨を抱いて出かけようとすると、ガランとした鳥小屋に、何やら動くものが見えて居ります。よく見ると、一羽の金鶏鳥がもらわれ先から帰えって来ているではありませんか。

「御主人様の御骨のおみおくりの間に合ってよかった。」とでも言いたげな様子で。驚いて家中の者が鳥小屋に集り、帰えって来た鳥と再会しました。何キロも離れている遠い所から、どうやってこゝ迄帰えってこれたでしょう。鳩でもないのに、今もって判らない不思議な出来事でございました。

この鳥小屋がある私共の庭は、一木一草に至る迄、主人が植えてくれました思い出多い庭、そして十年経ってやっと庭らしい庭になって来た所でございます。この庭と、年中

工作の鉄鎚の絶えなかった家と、鉄鎚の聞えない時は、珍妙な楽の音の絶えなかったこの家とを後にして、私共は、材木座に越してゆく事になりました。

帰えって来た金鷄鳥は、孫の手に抱かれて娘の市川の家へと出かけて行きました。あとには唯、薄紫の大根の花が、淋しく風にゆれて居りました。

全ての物が去って行ってしまった。静寂な庭に佇んでいると、主人の手作の楽器の音がはるか彼方から風に送られて流れ渡り、それに合わせて楽しげな主人の歌声が聞えて来る様で思わず耳をすまして聞入ったことでした。

今頃主人は、かつて幾度となくゆききした南の島々の熱帯の木々の生い繁る中で、あの鮮やかな色の鳥達と天翔け巡って居ります事でしょう。

一四七、二、四一

最後に、再び愛甲氏のお言葉を拝借して、本書を閉じることにした。

……私は冒頭にもいったが、有坂の人生そのものが芸術だったと思う……（中略）……

有坂の先輩、同僚、後輩は兵科将校、技術者としての有坂のプラス、マイナスを知っている人は多いと思う。

しかし、人間有坂を知っている人は零ではなからうが極めて少ない。……………

あとがき

早いもので、有坂磐雄さんがお亡くなりになってから、今年で十年になります。編者兩名は、数年前から有坂さんの事蹟を何等かの形で残しておくのがわれわれの義務であると話合っておりまして。

このような伝記としては、明治以後では森鷗外の「浪江抽斉」をもって第一とすることには、ほとんどの人が異議ないようです。しかし、これは鷗外ほどの大人物にしてはじめて抽斉に迫り得たのです。鷗外にくらべれば百kWと一Wにも等しい編者には、有坂さんのすべてを書きつくす事は無理というものです。

そこで、急遽方針を変更して、有坂さんの電波工学に関する事蹟を主として本書「電波と共に」を発売させていただく事にいたしました。

しかし、書中にも述べましたように、有坂さんの残されたものは決して電波工学のみではありません。後日どなたかによって、有坂さんのすべてを網羅した抽斉伝の如き名作が世に出ることを心から期待するものです。

本書を刊行するに際し、多くの方々の文献を引用させていただきました。また、きわめて短期間で完成して下さったCQ出版社の方々にも共に厚く御礼申し上げます。

さまざまの事おもひ出す櫻かな 芭蕉

昭和五十五年四月

編者 岡本 次雄

電波と共に

——有坂磐雄伝—— (非売品)

昭和五十五年四月二十日発行

発行者

有坂言子

有坂英雄

有坂芳雄

編者

岡本次雄

鎌倉市材木座一の二の一七

木賀忠雄

三鷹市上連雀九の二一の八

製作者

CQ出版株式会社

東京都豊島区巣鴨一の一四の二